

まえがき

著者	佐藤 寛
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	アジアを見る眼
シリーズ番号	94
雑誌名	援助研究入門：援助現象への学際的アプローチ
ページ	[iii]-[v]
発行年	1996
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00017728

開発援助とは、不思議な現象である。

長い人類の歴史のなかで、このような異文化間交流のあり方はかつてなかった。われわれにとって「自然な」異文化間交流の形は、「戦争」と「交易」である。

戦争は「力」の交換であり、強者が弱者を支配、あるいは搾取する。戦争が行われている時、互いの意図と（力のあるものが勝つという）ルールは双方に共通に理解されている。植民地支配はこうしたルールに基づく異文化間交流の一形態であった。

交易は「モノ」の交換である。双方にとって有益なモノが両者の合意のもとに交換される。実際には不平等な交換もあるが、原則的には両者の立場は対等であり、交換される利益は等価であるというルールが、これまた双方に共有されている。

これらに反して「援助」はきわめて「不自然な」交換の仕方である。というより「先進国」から「途上国」へ（あえて言えば強者から弱者へ）一方的に金、モノ、技術、人材などが流れるだけなのだから、厳密には「交換」ですらないのである。もちろん、政治的な支援とか、経済

的な市場の確保といった間接的な利便は発生し得るが、これは援助それ自体に本質的にともなうものではない。

援助現象が発生したのは、二十世紀も半ばを過ぎる頃からであり、この不思議な現象に対する不慣れと戸惑いは、援助する側にもされる側にも等しくみられる。この戸惑いの故に、援助は意図に反してさまざまな誤解や摩擦を生んだり、時に悲劇を生んだりするのである。善意に発する（はずの）行為であるにもかかわらず、なぜこのようなことになるのだろうか。

それはおそらく、「援助現象」の両端にいる「私たち」と「彼ら」との間に共通の理解とロールが成り立っていないからである。それどころか「私たち」自身の間にさえ「援助とはどのようなものか」ということに関する共通の理解は存在していないのではないだろうか。援助する側の「理念」について語られることはしばしばあるが、援助される側にとって、援助という現象はいったいどういう意味をもっているのか、社会にどのような波紋を投げかけるものなのか、についてはよくわからないままプロジェクトが実施されていることが多いように思われる。つまり、われわれは「援助現象」を理解していないのである。そうであれば、「援助現象」を理解しようとする真剣な知的作業が必要であろう。これが「援助研究」が求められる背景である。

加えて、「援助現象」は研究対象としてそれ自体きわめておもしろいのである。

地球上の物流、情報流がきわめて大量・高速・緊密になったことを背景として「援助現象」は成り立っており、この意味で援助は優れて「二十世紀的（そしておそらく二十一世紀的）」現象である。それゆえ援助現象は現代世界のさまざまな問題を凝縮してみせてくれる。同時に援助プロジェクトの現場は、地球上のさまざまな異文化がぶつかりあう場としても、たいへん興味深い。

さらに、世界第一位のODA大国になった結果、日本は「援助現象」全体のなかで抜き差しならない重要性を担うにいたっている。したがって、日本社会および日本人は、「援助現象」の今後にさまざまな影響力を及ぼすことができる立場に（潜在的には）立っているのである。大げさに言えば、援助は地球社会の今後に日本人が直接関与できる数少ない窓口なのである。感性豊かで、かつ地球社会の将来を真剣に考えようとする多くの若者たちが、現在「開発」ないし「開発援助」の問題に興味をもち、勉強したいと思っていることは、ゆえなきことではない。

われわれは、読者とともに「援助現象」に対する理解を少しずつ深めていきたいと思う。本書が援助現象理解のためのヒントを一つでも二つでも提示できれば幸せである。

一九九六年十月

佐藤 寛

【執筆者紹介】（執筆順）

佐藤 寛 さとう ひろし 一九五七年生まれ。アジア経済研究所経済協力調査室。専門は開発社会学、地域研究

（イエメン）。

一九八七—八八年 イエメン・アラブ共和国にて日本大使館専門調査員（技術協力担当）

中川 淳司 なかがわ じゆんじ 一九五五年生まれ。東京大学社会科学研究所助教授。専門は国際経済法学、政府開発

援助論。

一九八一—八二年 日墨交換留学生としてメキシコにて在外研究

一九九四—九五年 国際開発高等教育機構（FASID）研究フェロー（Harvard Law

School）

朽木 昭文 くちき あきかみ 一九四五年生まれ。アジア経済研究所経済開発分析プロジェクトチーム主任調査研究

員。専門は開発経済学。

一九八九—九一年 海外経済協力基金経済部（出向）

大橋 正明 おほはし まさあき 一九五三年生まれ。恵泉女学園大学人文学部助教授。専門は国際開発学、NGO研究。

一九八〇—八二年 シャプラニール・市民による海外協力の会・バングラデシユ駐在員

一九九〇—九三年 国際赤十字・赤新月社連盟兼日本赤十字社バングラデシユ駐在員

中西 徹 なかにし とおる 一九五八年生まれ。東京大学経済学研究科・経済学部助教授。専門は開発経済、地域

研究（フィリピン）。

一九八九―九〇年 国際協力事業団経済協力評価調査（フィリピン）

一九九〇年 外務省経済協力評価調査（インドネシア）

一九九一年 外務省経済協力評価調査（タイ）

一九九三年 外務省経済協力評価調査（マレーシア）

山森 正巳やまもり まさみ 一九五九年生まれ。海外コンサルティング企業協会副主任研究員。専門は応用人類学。

一九八八―九〇年 ユニセフ・ペルー事務所勤務

一九九〇―九二年 JICAケニア人口教育促進プロジェクトに専門家として参加

一九九六年― 米州開発銀行専門家としてグアテマラ駐在

重富 真一しげとみ しんいち 一九五八年生まれ。アジア経済研究所地域研究部。専門は地域研究（タイ）、農業経済

学。

一九八六年 国連地域開発センター研究員

久木田 純くきた じゆん 一九五五年生まれ。国連児童基金（ユニセフ）駐日事務所。専門は社会心理学、参加

型開発

一九八六年 ユニセフ・モルジブ事務所、同東京事務所を歴任

一九八九―九二年 同ナミビア事務所にて、地域を基盤とする参加型開発のモデル作りに

従事